

伝承地：野沢町386

参考書籍：4・7・8・17・20・40



(亀田さん宅の静桜)

野沢の日光街道から東に入った亀田さん方の庭先に、源義経の妻として有名な静御前にちなんだ桜がある。この桜の木は、昔から「静桜」あるいは「御前桜」と呼ばれ有名である。桜の花は、ふつう5枚の花びらであるが、ここの桜は、5枚の花びらの中にかぶとのくわ形のような形をしたものがある。それは、花びらがかぶとを抱いているように見える。義経を慕った静御前の気持ちが、のり移ったようなこの桜の木には、次のような悲しい言い伝えがある。

なお、亀田さんの家の裏手は竹林となっていて、その中に約5mくらいの池がある。この池は鏡ヶ池と呼ばれており、義経の死を聞いた静御前が、鏡を捨てることによって、女としての命を絶ったと言われている。

源平の争乱が一応おちついた文治^{みくに}3年(1187)、兄の源頼朝に追われ奥州平泉に身を寄せている義経を慕って、静御前は亀井六郎、駿河次郎をおともとし平泉に向かって旅立ちました。途中、宇都宮の二荒山神社にお参りした後、一行はさらに北に足を進め、野沢までやってきました。

しかし、静御前は自分の生んだ男の子が頼朝に殺された心痛と、なれない長い旅の疲れから、はからずも病む身となり、日に日に病気は重くなっていきました。おともの二人は、近くの池から冷たい水をくみ、手厚いかんごをしました。また、昼夜を問わず、神仏にも祈りましたが、静御前の病いはなかなかよくなりませんでした。病いに伏して、しばらくたつと奥州から鎌倉にむかう若い旅人の話し声が、静の耳に入りました。それは、奥州にいる義経公が、おともの弁慶と衣川のほとりで討ち死にしたというものでした。これを聞いた静御前は、恋しい夫、義経の死を深く悲しみ、間もなく亡くなってしまいました。おともの亀井六郎と駿河次郎は、村の人たちに手伝ってもらって大きな塚をつくり、手厚く葬りました。そして、その時、亀井六郎と駿河次郎は、義経から贈られ、生前大切にしていた桜^{つばき}の杖を塚の中央に逆さにさしました。しばらくすると、その杖から芽が出て、葉がしげり、美しい桜の花が咲くようになりました。その花は、静御前が義経を抱いているように見える不思議な形をしているので、村人たちは、だれ言うとなく「静桜」あるいは「御前桜」というようになりました。

